

同時代としての
戦後

本草綱目



同時代としての戦後

昭和四八年三月二十四日 第一刷発行

昭和五二年八月三〇日 第三刷発行

著 者 大江健三郎

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二二二／郵便番号一―二
電話東京(〇三)九四五―一―二二(大代巻)／振替東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

定 価 九八〇円

落丁本・乱丁本はお取り替えます

© Kenzaburo Oe 1973, Printed in Japan

同時代としての戦後・目次

われわれの時代そのものが戦後文学者という言葉をつくった 7

野間宏・救済にいたる全体性 9

大岡昇平・死者の多面的な証言 33

埴谷雄高・夢と思索的想像力 57

武田泰淳・滅亡にはじまる 81

堀田善衛・Yes, I do. 105

木下順二・ドラマティックな人間 129

椎名麟三・懲役人の自由 155

長谷川四郎・モラリストの遍歴 179

島尾敏雄・「崩れ」について 203

森有正・根本的独立者の鏡 225

死者たち・最終のヴィジョンとわれら生き延びつづける者 247

装幀
田村義也

同時代としての戦後——大江健三郎

われわれの時代そのものが戦後文学者という言葉をつくった

新しい「戦前」が、重く、制禦しがたく、苦しく、時代によって懐胎されていると告げる声がおこっている。しかし、よく「戦後」を記憶し、それをみずからの存在のなかに生かしつけている者のみが、もっともよく新しい「戦前」を感知するであろう。そして、戦争を、また「軍国」を。被爆二世たちは、原爆経験について、あの朝、広島に核爆発の閃光がきらめく瞬間まで、そこは「平和」な市街だったのだ、とする思い出のかたちをうち崩すことを、かれらの運動の出発点のひとつとした。たしかに、よく現実と歴史にそくして、そこを見つめる者らの眼に、原爆直前の広島は、「軍国」の一地方都市であったのだ。その視点に立って、いわば、核爆弾をおとす、空中にある者と、それをおとされる、地上にある者とを、ともに撃つようにして、かれらは、ついには白血病をふくむ、すべての原爆症から、人間をとりかえず、すべての核兵器体制から、人間をとりかえすべき運動にむかっている。原爆症によって死んだ、被爆二世について報告する時、かれらは、自分たちがこの人間を白血病からとりかえせなかったのは、と強い憤りを自分たち自身にこそ向けながらいう。かれらは世界最終戦争であるかもしれない、新しい戦争にむ

かう「戦前」を、いまもつとも敏感に認識している者らであろう。かれらの血の遺伝子のなかには、「戦後」すらもなお、おとずれていないのであるが。

これから僕がめざすのは、自分をふくみこみ、とりかこむ新しい「戦前」のなかにあって、あらためて、より確実に「戦後」を認識することである。それはすなわち僕自身が、これが自分たちの時代なのだと、ひきうけざるをえない同時代の実体を、より正確に把握することである。

われわれの前には、戦後文学者と呼ばれた作家たちの、現にこの時代にかかりつづけながらの活動がある。かれらに冠せられた戦後文学者という名は、およそ近代以来の、わが国の文学的造語のうち、もっとも充実した意味内容をもつ言葉であろう。それは、個人の恣意や、集団の政治がつくりだした言葉ではなかった。時代そのものが、この言葉をつくったのであった。

戦後文学者たちは、新しい時代にむけて、その仕事をはじめた。しかも、かれらはことごとく、ひとつの終末観的ヴィジョン・黙示録的認識を、その存在の核心においているように感じられる。それはいま、新しい「戦前」の凶々^{まが}しいものをはらんだ微光に照して、その全体が、かならずしもくつきりと浮びあがるというのではないが、しかしそれがそこに実在することは、疑いようがないと思える。それらの存在の芯をつらぬくようにして、僕は、同時代としての「戦後」をとらえなおすことをしたい。われわれの時代を明日にむけて新しくとらえることをしたい。

野間宏・救済にいたる全体性

緑のマニラの街は

赤、白、黄、色とりどりに粧うて……

小さい黒い人々をのせ

銀の鋏ある勒をつけ

往き来する小馬馬車カロマタの軽い蹄の音の

わが心の内にふれてくる

ひとの天井高くさかしまに住う守宮のような

このくにのさかしまの文明の悲しみの、

ひとを殺したわが心の内にふれてくる。

朝もののまださめないとき

ふと自分ばかりが目覚め

枕元の仏桑花の赤い花びらかぞえていると

ギターをもち、ひからびた裸足をして街角に踊りをおどる

父を失った娘達の姿が浮んでくる。

この詩は、ペタースンの戦闘をおえ、ペタースン半島の先端、鰐形えらのコレヒドール島が見える海岸で病氣になり、トラックで後送され、リマイの野戦病院に一晚おかれ、マニラの陸軍病院に入れたら、マラリアと東洋毛様織虫病におかされている野間宏が、戦場に携行したノートに書いたものだ。いま『青年の環』を刊行し終えて、この大作についてやした、まことに厖大な労力が、その肉体から挽ひぎとるようにして奪ったものを回復させようとしている作家が、あなたは終末観の世界を、黙示録的な世界を、戦争の終りに見たのではなかったでしようか、という僕の、それこそ手さぐりするような、意味の限定の不十分な問いかけに答えて語りはじめたのは、敗戦に数年さきだつ、このペタースン半島の戦闘の経験についてにはかならなかった。戦争の終り、敗戦、それについては予見していた、というより、あらかじめ知っていた、わかっていたから、と科学的なマルクス主義者である野間宏は、はじめに僕の問いかけを、より確実な論点にみちびくことから始めた。

僕がこれから、その同時代性をたしかめてゆきたいとねがう、戦後文学者たちはみな、野間宏の言葉にみちびかれつつ考える時、たしかに一九四五年夏の敗戦を、あらかじめ知りつくしてい

た人々と呼ぶべきではないであろうか？ 大岡昇平は、ミンドロ島サンホセに駐屯した後、山中に敵軍を避けて、しかし俘虜となり、レイテ島の収容所において敗戦を見すえていた。武田泰淳、堀田善衛は上海で、敗戦を見つめていた。そしてかれらはみな、沈鬱な、よく見える眼と、よく認識する頭で、かれらをふくみ日本人みなをふくみこむ、巨大な嵐の新しい局面を測るような態度で、敗戦を、あらかじめ知っていた人々であった。

野間宏が、そのバターン半島における戦闘の経験について語ったところのことは、すべて、すでにかれが小説に書き、またエッセイに書いているところのことである。われわれは筑摩書房版『野間宏全集』の様ざまな箇所においてそれを発見する。

小説についていえば、それは『バターン白昼の戦』であり、『南十字星下の戦』であり、『砲車追撃』であり、『コレヒドールへ』である。エッセイはおよそ枚挙にいとまもない。右にあげた一連の小説を、野間宏は、一九五二年暮から、五八年にかけて断続的に発表しているが、それらの小説を書かぬまえから、書いたあとにかけて、まことに様ざまなエッセイのかたちで野間宏は、バターン半島での戦争の経験と、どのようにそれを小説のかたちにつくりあげるかを語っている。しかもすでにこれらの小説を発表したあと、野間宏は、へ私はまだ戦場での日本軍隊、戦闘する日本軍隊を作品に書きあげていない。しかし、私はバターン半島のマリベレス山の細いけわしい山道を、歩兵砲の大きな重い鉄の防楯を背にして、ひよろひよろと歩きながら、地獄に似たものがそこにひらけていると考えていた。』と語っているのである。

それは、いったん右にあげた小説群を読みすすめてきたわれわれには、不思議な言葉である。それは野間宏が、実際に、これらの小説をまだ書いていない、一九四九年にのべている「戦争を主題にした小説を僕はまだ書いていない。」という言葉とまっすぐつらねながら語るかのようであるからだ。

しかしそれは野間宏にとって、バターン半島での経験をいったん小説に書きあげたあとも、それがなおかれの意識の正面にとどまって、かれの肉体と魂とに沸騰的な関係をもちつづけていることこそを意味しているのではないであろうか。僕は、原爆についての文字によって示された、また映像によってあらわされた、いかなる作品についても、絶対に例外なく、広島の被爆者たちの中心的な反応が、いや原爆はあのようなものではなかった、あれよりいくだんも恐しくすさまじい経験であった、という批判であることを知っている。野間宏の戦闘の経験と、それはすっかりおなじものではない。しかしいま僕は、野間宏の場合をつうじて、被爆者の場合にも、原爆の経験がいまなお現在の時制において生きているのであり、それとの肉体と魂との沸騰的な関係が、あのような言葉を発せしめる力のひとつをなしていると、考えることができるように思う。かれはその経験から、ぬけだすことができない。つねにその経験はかれらの頭上につりさがっている。

もっともひとりの作家のなかで、かれをつねにとらえている経験が、どのような手つづきをとって、どのような時を経過して、小説となってあらわれるか、ということは、独特なおもしろさを